数字は残酷だ。新型コロナウイルス感染症が猛威を振るっていた頃、毎日のように「今日の新型コロナウイルス感染症による死者数は〇〇名です」という報道を耳にしていた。また国内外で災害等が起こるたび、真っ先に「死者数は〇〇名です」と報道される。他人である私たちにとってそれらの数字はその規模を推し量る参考でしかない。命が数字で表された途端、その命のひとつひとつに大切な人生があり、その人を大切に思っているたくさんの人たちがいる、ということを私たちは忘れてしまいがちだ。

「多くのことを語りたくはない。」

これは私の曽祖父が生前よく口にしていた言葉だそうだ。曽祖父は結婚してしばらくした頃、戦争に召集され外国へ向かった。戦争が終わり帰国した曽祖父は、遠い戦地で何が起きたのか、何を見たのか、何をしたのかを一切語らなかったという。ひとり遠くを見つめじっとなにか考えこむ様子が頻繁にみられたそうだ。

曽祖父が亡くなり火葬をしたとき、右足部分から大きな黒い弾丸が焼け残った。ひ孫である私は、その古い弾丸を手にするたび言葉にならない感情を抱く。これは人間の手によって銃に詰められ、殺そうという強い意志を持って曽祖父に向け撃ち放たれたものなのだ。足を撃たれ歩けなくなった曾祖父を、命をかけて抱えて逃げてくれた仲間たちがきっといたのだろう。そうして曽祖父は生き延び、今私のこの命へと繋がっている。

津田梅子のスピーチにあるように、学びとは能動的で実践的なものであるべきだ。ただ見て聞いて暗記をすることではない。正しく理解し、考え、ときには疑問を抱き、そして行動へ繋げる、それこそが学びだ。私は曽祖父の残した黒い大きな弾丸を手にしたとき、その背景にあるものを知らなければならないと感じた。生前曽祖父が語りたがらなかった厳しい現実を受け止めたいと思った。弾丸を曽祖父に放った敵の兵士の殺意と混乱、そしてその背景にあったもの、生きて日本に帰れなかった戦地での仲間たち、その他犠牲になった大勢の人々、彼らはただの数字ではなく感情のある生身の人間だったのだ。そこに敵や味方、国籍、性別は関係がない。「戦争で〇〇人が犠牲になりました」という言葉のその奥にあるもの全てを私たちは理解し受け止め学び、それを未来へと受け継がなくてはならない。

私たちは幼い頃から学校でたくさんのことを学び教訓を得ているはずなのに、今この瞬間も戦争や紛争が世界の至る所で起こり、環境破壊や様々な差別問題等も一向に終わらない。それどころか SNS や科学技術の発達により新しい問題も次から次へと起きている。無知でいること、そして不都合な現実や真実から目をそらすことはなによりも恐ろしい。過去に起きたこと、今この瞬間に起きていることを正しく理解し、その背景にある見えないものまで深く考え、そして広い視野を持って判断し、積極的に行動をする、そのために私たちは日々学び知識を増やし経験を重ねている。未来は私たちがつくるものなのだ。